

## カンキツの春枝摘心による穂木生産について

堀江裕一郎・草野成夫 (福岡県農業総合試験場)

Yuichiro HORIE, Nario KUSANO : The Pinching of Spring Shoots for the Production of Scion in Citrus

果樹の苗木生産において、穂木の品質は接ぎ木活着率やその後の摘心・誘引等生育管理作業に大きく影響を与える。実際、一般栽培園の樹から採穂した園穂は、苗木の先端を穂木として利用する苗木に比較し品質が均一でなく、接木後の活着率も劣る傾向にある。本報では、品質の良い穂木を大量に生産するため、春枝の摘心程度について検討を行ったので、その概要を報告する。

### 1. 材料及び方法

カンキツウイルスフリー樹の“堂脇早生”3年生、“橋本早生”3年生、“興津早生”3年生、“大津4号”3年生、“マーコット”4年生を供試し、1987年7月22日～24日にかけて、以下の摘心処理区を設け、その後の夏枝発生状況、穂木生産量を調査した。

I：春先の先端から1/2をせん除した区。

II：春枝の先端から1/3をせん除した区。

III：せん除しなかった区。

調査対照の春枝は、各品種とも20cm以上のものとした。穂木の規格は、充実良好なもので基部の口径を4mm～8mmのものとした。施肥は7月14日、8月11日に10a当たり成分で窒素13.2kg、リン酸9.0kg、カリ8.8kgになるように実施した。

### 2. 結果及び考察

各品種、各処理区とも春枝基部径が大きくなるほど夏枝の発生本数は増加する傾向にあった。

夏枝の発生、穂木生産量については、処理区間の傾向として、“堂脇早生”“橋本早生”“興津早生”の比較的樹勢の弱いAタイプと“大津4号”“マーコット”の樹勢の強いBタイプに2分された。

Aタイプの品種では、摘心する事によりBタイプの品種よりも夏枝の発生本数が多くなった。しかし、発生した夏枝の中には弱小枝が多く、穂木として使用可能な本数割合(穂木率)は低くなった。結果的には、Aタイプの品種では摘心をしない方が穂木生産量が多かった。

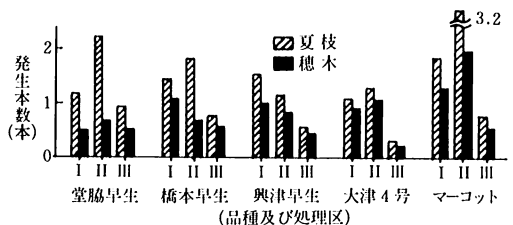
Bタイプの品種では、摘心する事による夏枝の発生本数増加が、Aタイプの品種に比べ少なかった。反面、穂木率はAタイプに比べ高くなり、摘心することが穂木の生産量向上につながった。

穂木生産に対する摘心の程度について、摘心の効果が認められたBタイプの品種のうち、大津4号はII区で、マーコットはI区でその効果が高かった。

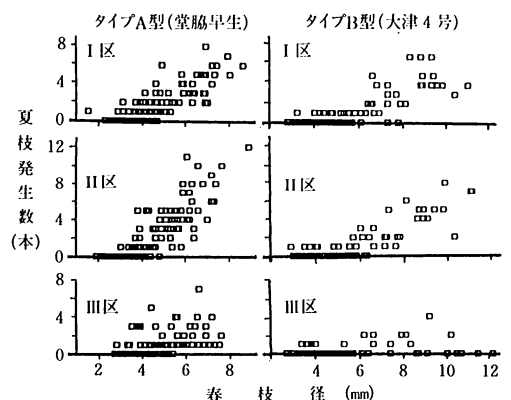
以上のように穂木生産に対する摘心効果は、品種により異なった結果となったが、今後は摘心の時期とも併せて、さらに検討を重ねて行きたい。

第1表 春枝摘心による穂木の生産(1987年)

品種名	処理区	調査春枝数	穂木率		1樹当たり穂木生産量	
			本	%	g	g
堂脇早生	I	152	42.5	3.2	24.4	
	II	134	31.4	2.7	24.6	
	III	123	53.5	7.5	45.5	
橋本早生	I	47	75.0	2.9	18.3	
	II	56	39.0	2.4	11.8	
	III	61	73.9	6.2	26.5	
興津早生	I	110	65.1	2.9	35.2	
	II	111	72.8	3.4	34.7	
	III	132	80.3	7.6	43.3	
大津4号	I	99	85.8	4.8	62.9	
	II	87	82.1	6.1	80.2	
	III	82	75.0	8.6	22.1	
マーコット	I	116	70.9	4.0	100.7	
	II	68	60.7	3.8	83.7	
	III	120	72.8	3.8	42.8	



第1図 春枝当たり夏枝、穂木発生数



第2図 春枝径と夏枝発生数